

# 支部研究会報告

## 東北支部

東北支部では7月10日午後6時から東北電気会館で恒例のOR研究会を開催、東北電気通信局経営調査室 荻野正浩氏の「情報源における電話の位置づけ」と題し、身近な仙台都市圏を中心とした研究結果の講演、札幌大会に出席された東北大・高橋先生の委員長会議および大会もよりの報告があり、活発な質疑討論が行なわれた。別会場の懇親では河北新報 後藤義雄氏寄贈の宮城県沖地震災害記録を中心に、ほぼ1カ月前の体験談に花が咲いた。以下はそのときの講演要旨である。

都市広域化の問題は巨大都市東京を筆頭に、東北の小都市周辺にまでおよび、その形態も住宅団地開発から工業団地造成、バイパスぞいの企業進出等各種のパターンがみられ、規模も千差万別で、一方にドーナツ化現象が、他方に過疎化・スプロール化現象が同時進行する跛行現象が目立っている。この都市発展形態・段階の違いで、地域社会構造が変化し、社会・経済・政治・文化も量的・質的变化をとげ、それが情報ひいては電気通信に対する評価をも左右する。こうした都市広域化現象の中の人流・物流に対する電気通信の役割、反対に電気通信が広域圏化に果たす役割を探り、各種需要予測・販売・PR等に必要の調査研究が進められている。

仙台市は周辺市町村をまき込んで百万都市を形成し、

激しい膨張を続け、東化の中核都市としての地位を固めつつある。本調査研究はこの仙台圏をモデルに分析を進めているが、その一環として52年9月末現在で実施したアンケートによりつぎの事項が明らかになっている。

都心では3割をこえる単身者 農村に3世帯家族も  
都心では自宅居住者が半分以下

20才前後は都会暮らし 25過ぎると郊外へ

定住性7割 借家暮らしは2～3年以内に4割引越

電話をもたない20代以下 単身 借家ぐらし

住宅電話 利用のトップは団地の配偶者8割

住宅電話の基本的利用は身内への通話

電話の最大メリット 即時性 増加する情緒の利用

このアンケートの中で、さらに情報項目と情報手段との相関関係をマトリックス(2way方式)で調査した。種々の情報手段の中で、電話の情報源としての位置づけを探るのが狙いである。解析手段としては両属性の総合的類似性を比較する意味で、数量化手法Ⅲ類を応用し、その適合性をも検討することとした。

この結果は図のとおりである。 $1x(1y)$ は情報格差が小さく不適解として除外した。結果の意味づけは他の手法と同じく社会学的判断によっており、

$2x$ 軸:「情報手段を行使する主体」で、右は個人

左は組織体・マスコミ機関

$3x$ 軸:「情報手段アクセスの追従性」で、上は敏感  
下は鈍い

$2y$ 軸:「情報に対する要求態度」で、右能動 左受動

$3y$ 軸:「情報内容の共通性」で、上は個別 下は共通を示す。つまり、電話が並外れた追従性・即時性を持ち、それと対応して個別の情報に最も適した手段としての位置づけにあり、将来展望は基本機能を生かしつつ、ミニコミ分野への進出をはかるべき道が示されている。

主成分分析・因子分析では類似の性格もあらわれたが、両属性の対応に十分な意義づけが見出せなかった。

この応用手法は個体タイプが一方の軸を占有しないで、2つの属性的要因群を同時に数量化し位置づけを試みる点で手軽に利用でき、実務的にも成果があったものであり、他の分野での応用が待たれるのである。

